

## 会議の概要（議事録）

会議の名称	(番号) 1-49	墨田区基本構想審議会 第3部会（第5回）		
開催日時	令和6年11月25日（月） 19:00から21:00まで			
開催場所	131会議室 区役所13階			
出席者数	【委員】上野武（部会長）、金谷直政、岸成行、木村優太、佐藤祥子、杉山達雄、須藤正、真鍋文朗、山本俊哉（計9名） 【事務局】楠政策担当課長、政策担当主査（田部井）			
会議の公開 （傍聴）	公開(傍聴できる) 非公開(傍聴できない)	部分公開(部分傍聴できる)	傍聴者数	5人
議 題	1. 第3部会のまとめ			
配 付 資 料	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. まちづくり・都市基盤分野における未来予想図（案）</li> <li>2. これまでの未来予想図（修正案）</li> <li>3. 基本構想の構成、第3部会における未来予想図全体像</li> <li>4. 各分野における区民等の意見の反映             <ol style="list-style-type: none"> <li>4-1. 地域活動、防災・防犯分野</li> <li>4-2. 景観・水辺空間、環境分野</li> <li>4-3. まちづくり・都市基盤分野</li> </ol> </li> <li>5. 区民ワークショップ、オープンハウス型説明会まとめ</li> <li>6. 子どもの意見（タウンミーティング）</li> <li>7. 若手職員ワークショップからの提案</li> <li>8. 若手職員ワークショップ提案書</li> </ol>			
会 議 概 要	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 木村委員から資料配布 木村委員から配付資料の説明が行われた。</li> <li>2 前回の振り返り 事務局から、資料1及び2について説明を行った。</li> </ol> <p>（上野部会長）</p> <p>前回のまちづくり・都市基盤に関する未来予測図と、これまで議論してきたことを踏まえ、地域活動、防災・防犯分野と景観・水辺空間、環境分野について修正の上、まとめてもらった。</p> <p>まず、まちづくり・都市基盤分野についてご意見をいただきたいと思う。これについては、挙手してご意見いただければと思うがいかがか。</p>			

(金谷委員)

今まで話したことが、だいぶ文字としてまとまってきて、少しずつ見えてきた。まとめていただいて大変ご苦労があったのではないかと思います。

形としてイメージできるようになってきたが、一点、始まる前から気になっていたこととして、部会が分かされると、やはり他の部分と横のつながりが出ないと思った。教育と防災まちづくりというのは実は大事な事なのかなということで、どの場所と言おうかなと思いつつ、なかなかそういう場もなかった。

防災がなかなか進まないとか、そういったことというのは、やはり世代によるギャップがあるのかなと思っている。実際に古い建物とか古いまちに住んでいる高齢の方にとっては、このままでいいのではないのかと、こう言ってしまっただが、老い先のことを考えると、新たな投資とか控えてしまうというのはやはり見受けられることもある。けれども実際そういう方も自分の家庭とか親族を見れば、子どもがいて、孫がいる。そういう人たちと一緒にこれからも住んでいくと考えると、子どもたちから高齢者に対して働きかけるということは実はすごく大事なのではないか。子どもの教育の中に、もう少し防災というか、リテラシーという少し聞き慣れない言葉になってしまうのかもしれないが、すみだの子どもたちは防災の基本的なことを理解しているというか、リテラシーが高いというような、教育の中にも防災が入ってくるようなことがあってもいいのではないかと常々思っている。

そうするとおじいちゃん、おばあちゃんに対して、もう少し建物強い方がいいのではないとか、もっと安心して遊びに行けるのではないとか、お互いに長く安心して暮らせるのではないとか。防災というと、どうしてもつまらないというか、毎年防災訓練する義務みたいなところがあるけれども、それが作り出す何か楽しい生活とか、そういったものが、教育の中でももう少し理解してもらえるようになってくる良いとかなり感じた。

(事務局)

今いただいたお話はとても大事なことで、それは非常にすみだらしさというところを作ることにもなっていくのかなと感じる。これまでもいただいているところではあるが、分野別で議論させていただいている中で、教育という分野で書き込むのか、防災という分野でそこを書き込むのか、それとも、上位のまちの未来像というところで書くべきかということも考える。

とても大切なご意見であると思うので、反映できるように今後検討する。

(木村委員)

子どもの意見とかを見てみると、そんなに水辺空間にこだわっていない。それよりもきれいなまち。タバコが捨てられているのが嫌だとか、公園で制限されているとか、もっと楽しくしたいとか、何かそういう息苦しさみたいなのを訴えているような気がしていて、水辺空間は大人の事情が入ってしまっている感じがどうしても否めない。10年後はその水辺空間を大切にすることが一番メインなのかなというところがまだしっくりきていない。水辺空間を否定しているわけではなくて、主が何なのかということ。メインメッセージが水辺空間でいいのかということ、ま

だしっくりきていない。キーメッセージとしての水辺空間はありだと思う。

(上野部会長)

これは資料2の方の話か。まず資料1の方のご意見をお願いしたい。

(岸委員)

資料1のまちづくりの中で、目に見えるまちづくり、いわゆるハード的な目に見えるまちづくりと、それからソフトな目に見えづらいまちづくりがあると思う。その辺をもう少し整理したらいい気がする。

これは主な意見なので、ある意味羅列されたと思うが、例えば沿道の不燃化という言葉があって、非常にハードな、イメージしやすい部分だが、その後、環境作りとかまちづくり云々と書いてあるところは、少しソフトなところがある。その辺をうまく整理するというか、うまく繋げるということかな。そんなところを少し工夫したらいいのかな。

それとさきほど事務局からのお話で、資料のサードプレイスという言葉が、すぐ理解いただけるのかなと思う。これも注意書きで言葉の説明をしなければいけないのかなと感じた。

(事務局)

資料に記載の「主な意見」というところは、基本構想に載せるものではなくて、下のところの文章の方を掲載するイメージでいる。サードプレイスというのは、文章の中では使わない形で今のところ考えている。ご指摘のとおり、ぱっと聞きで伝わらないというふうに思う。

あと先ほどのソフトの部分とハードの部分というようなお話も、やはり両方もうまくつながり合って、まちができていくものだというふうに認識はしているが、なかなかそれを両立させながら書いていくのは難しい。

資料2の方でお話をさせていただいている地域活動、防災・防犯分野のコミュニティというような部分、こちらがどちらかというソフト的な方向のまちづくりをイメージしつつ、本日ご提示させていただいているまちづくり・都市基盤というのは、どちらかというハード寄りになったものをイメージしながら書いてみたということで、そこに違和感がないかというところの目線でまた見ていただくとありがたいと思っている。

(上野部会長)

墨田区はいわゆる都市計画的な区域としては第一種住居専用地域とかそういうものが全くない区。それはすごく特殊というか、他にない場所。やはり準工業地域がほとんどで、あとは近隣商業・商業地域。そういうことを改めて考えると、その中での住居はどうあるべきか、不燃化とか耐震化とかだが、不燃化というのがイコール例えばRCコンクリートで作るのがいいのかとか。やはり金谷委員がいる京島とかはまだ木造もあるけど、木造の不燃化みたいなことも結構いろいろ言われてきていて、国としては、木をもっと使おうみたいな話もあるが、そういうのと、この不燃化、耐震化というのがうまく共存できるような何かそういうようなことを、ど

こかで引っかけるといいという気がしている。それはもしかするとこの基本構想でなくて、もう一段落ちたところかもしれない。

(事務局)

ご指摘の通り、私どものイメージとしてはそういったところについては、もう1つ下の段階でということもある。木造の中でも不燃化に適した形での木造というものもあるので、そういったところをイメージして、この安全に安心して暮らせるというところの「様々な手法」という表現が広すぎるだろうというふうにも思うが、必ずしも今まで通りのやり方というよりも、そういった時代が変わって、技術が変わって、新しいものが生まれてくるものも活用して、理解を広げながら取り組んでいこうという思いを込められたらいいと思っている。

(木村委員)

2番の暮らしやすさの中でつながりを育むというところが、言いたい意味はわかるけれども、少し冗長的。いろんな文脈が混ざりすぎていて、なんかメッセージ性が弱いなと感じている。暮らしやすさの中でつながりを育むと言われても、どういう意味かを感じる。

ここがもし何か交流の場を生みたいな話だったら交流を育むとか、シンプルにした方がいいのかもしれない。でも交流を促進する空間作りや、複合的な土地利用の調和を進める、でも複合的な土地利用の調和とは何みたいなの。さきほどの横文字ではないが、もう少し柔らかいわかりやすい言葉にした方がいいと思う。

(事務局)

複合的な土地利用の調和というのは、まさにおっしゃられる通りで、少し行政的な言葉すぎるというのは正直認識していたところ。ただ、ここに込めているのは何よりも墨田区はコンパクトなところがいいという議論が以前にあった。そこがまず1つにあって、コンパクトにいろいろな機能があるというところの中に、それだけでなく、ゆるく繋がれる場所というのが必要だと思う。

一方で、便利になればなるほど、逆に高齢者には住みにくいまちになってはいけないとかいう風なお話もあったので、そういった要素を込めていったところ、おっしゃられる通り少し冗長かもしれないが、今申し上げたお話というのは、おそらく欠かすことができない要素がいくつもあったというふうに思いながらまとめた。これを逆に言うと2つに分けるか、やはり1つの中で冗長にしようかということかなというふうに思っている。

(上野部会長)

かつての都市計画はやはり住む場所、働く場所、公園、公共施設のある場所みたいな感じで色分けされていた。やはり今歩きやすいまちだと500m以内に全てがあるという、モザイク状にいろんな機能がまとまっているまちの方が暮らしやすいし、面白いのではないかというのが結構いろんな人たちが言い始めていることだと思う。

(木村委員)

中央的でなく分散的みたいな感じ。

(金谷委員)

この辺はすごくすみだらしくて、それが何かこういう言葉になったのかなと思う。上野先生がさきほど仰っていたけれども、墨田区は、住宅の専用地域があって準工業地域ばかりであって、建築の専門的なことでいうと、どの場所にもどんなものでも建てられることができるという特殊な場所。良い面もあって、悪い面もあると思う。

良い面としては職住一体になっていて、商店の上に人が住んでいて、工場の上に人が住んでいて、それはすごくみんな近いところに職場も住居もいいなと、私が好きな部分だけれども、ただ住宅と職場が一体になっていて簡単に変えることができないとか、事業をやっているので建て替えが簡単にできないという話になって止まってしまうようなことはある。その辺の事情が全国統一の法律でやはり縛られているので、どうしても先に進まないというのが地域にいると見えてくる。そこを何とかしようというのは国土交通省の話とかになるので、簡単ではないとは思いますが、何かそれをプラスに捉えることができないのかなというの少し思う。

高密度密集地帯で人口密度が高いと言うと、ゴミゴミして、何かマイナスのイメージだけれども、最近コンパクトシティという綺麗な言い方がある。実際によく言われているコンパクトシティはこういう高密なところを言っているのではなくて、どちらかという、超高層があって人がいっぱい住んで、その周りに緑がいっぱいあるようなところをイメージしているけれども、数値的に言えば、同じ広さの中に何人住んでいるということと言うとそんなに違いないはず。

墨田区ならではのコンパクトシティが実はもうできつつあるというのを、もっと肯定的に捉えることとか、伝えることができ、ある意味の理想型になっているということが、数値的に実は私もしっかりわからない。超高層で高密度のところと、木造の密集地帯が同じぐらいなのかというのはわからない。その辺は先生にもお聞きしたいけれども、同じぐらいだとすれば、別に悪い方向じゃなくて、高密度でコンパクトになっていて、ウォーカブルになっていると言える。超高層は1回エレベーター降りるのに5分ぐらい待って、また道歩いていくというのは必ずしも暮らしやすいとも思えない。

(木村委員)

コンパクトというのが、集まるイメージなのか、分散の意味なのかは少ししっくりこない。コミュニティの人とか、さっきの育児支援の人などからは分散しすぎて、やりにくいという結構言葉をたくさん聞く。どこに行くにしても、そこに行かなければいけないとか、それで今回すみだ保健子育て総合センターという横軸のようなく集約的なものは出来上がったけれども、そのコンパクトというのはどういう表現なのか。

(事務局)

コンパクトというところの中に、全ての場所が、例えば八広・押上・錦糸町・両

国・向島いろいろなエリアがある中で、全部が同じように同じ機能があるまちというよりも、それぞれの地域ごとの個性というのがあるのではないかと考えている。

ただ、それぞれの地域ごとの個性がしっかりと立ちながらも、生活に欠かせない機能というのはあるというようなものを、このコンパクトというものの中に込めたい。それを書くとどンドン冗長にはなっているけれども、この表現がいい、違うはあるのではないかとのご意見などをいただくといいなと思う。

(真鍋委員)

一文長いなと思う。一読で理解できないので、どこかで区切ってもいいのかなと思う。ご検討いただければと思う。

(岸委員)

コンパクトシティというのは、私の理解では過疎化が進むまちが住みづらくなっているから、いろんな施設を集約しようという理解だけれども、そういうものとすみだは違うと思う。すみだはコンパクトシティというよりは混在だと思う。混在というのは昔の都市計画では非常に遅れているのではないかと、そういう風な形で捉えられたけれども、今の都市計画から考えると、もしかしたら混在ということがトップランナーに変わる可能性がある。私は何かそういうことをもう少し打ち出したらいいのではないかなと思う。

混在というのは、決して悪いことではない。それが墨田区の特性だというのは誰もが理解していて、特性が例えば暮らし方とか、そういうコミュニティのこととか、いろんなことに波及していくのではないかな。だからそこをうまく表現すれば、混在というテーマからソフトのところと繋いでいくという表現ができるのではと思う。

(事務局)

多分認識としては皆さんお揃いなのだろうというふうに思っている。一方でコンパクトシティ的な、それこそ駅とかを中心にしっかりと必要な機能がまとまっているものをコンパクトと表現することは、全然おかしくないこととされている。こちらから主な意見というところで書かせていただいている通り、前回そうした議論がある中で、コンパクトというような表現が出てきたので、今回使わせていただいている。それが逆に誤解を生んでしまうのではないかなということであれば、言っていたような混在とか、他の考え方も取り入れていきたいなという風に思う。

(上野部会長)

混在がトップランナー的になるかもしれないというのは山本先生の方からもあったつながりが重なるとか、そういうところに繋がるような気がする。

(山本委員)

そういう意味で、だからつながるといえるのはネットワークという形で捉えられるのではなくて、いろいろな層が重なっていく。この後議論があるが、防災・福祉全部バラバラではなくそれらも重なっていく。エリアもコミュニティも重なっていく。町内会だけのコミュニティや外国人だけのコミュニティだけではなくてという

ようなこと。

ここの文章がすごく気になっているが、「人々の生命と財産を守る災害に強いまちが整備され」というのはかなりハードルが高い。今はもう国土交通省も河川整備を諦めてしまっている。これだけやはり気候変動があると、避難のことも考えなければいけない。

一方で我々が考えなければいけないのは大災害。首都直下地震、それから気候変動に伴う水害など。そうすると、大災害から命を守り、やはり財産というのは、逆に今度は被災から回復力というのがいろんなところでも言われているが、レジリエンスということになると、そこにやはり混住などいろんな支え合いが必要である。災害に強いまちを作っていくだけではなくて、楽しさもというようなこととなると、やはり安全性を高めていく。この間、墨田区の防災力が上がっているとは言え「災害に強いまちが整備され」というのは言葉としてきつと思う。

あともう一つ。「安心と楽しさが両立する」とあるが安心とは主観であり人によって受け止め方が違う。ここはやはり都市基盤はハードな面だから、ハード面というのは安全のこと。もう少し正確に言うと、安全性と楽しさが両立するという。もう出来上がったから安心をしている、というのは、実は危険で結構危ないこと。建物も道路も公園もハード面だが、一方でいろんなコミュニティであったり、協力であったり、少しそこら辺がここはすみだの地域特性を考えると、また10年後ということを考えると、キーワードとなるものをやはり改めていた方がいいかなという風に思う。

もう一つだけ申し上げると、安全に安心して暮らせるという、建物の不燃化・耐震化、避難場所の確保の取組、すみだはいろんな形でずっと取り組んできた。今危険だなと思うのは昔克服したであろう水害だと思う。

それが先ほどお話あったような平屋、2階建てというグループホームからすると水没してしまうというふうなところもあるし、隣に少し高いところがあれば、そこに逃げられるなどということを考えると、少しちょっと水害のことを、ここでは強調をしながら水害対策と地震・火災対策を重ねていく必要があると思う。

白鬚の防災拠点のところも、水害対策からすると、よくできているというような見方も出てくるだろう。だからここの文章が、それこそ他の区に合わせても、この両方とも当たり前の話になってしまっているのも、もう少し水に囲まれたすみだであるということで、この間、地震に対しては先進都市というぐらい、いろんなことやってきたということを、やはりこの後も続けていくというようなことを書いた方がいいのかなと思う。

(木村委員)

一部はハード、二部はソフトという形なのか。それともテーマがどう分かれているのか。

(上野部会長)

そこはどちらかという、そのソフト的なコミュニティ部分でというような風な話し方だけど、今回はハード、だから本当は別々に話すというよりもやはり一緒に話した方がきつといい。だから最終的にまとまる時にはその辺をうまく調整しな

がらやってほしい。

資料2の方も少しご意見いただきたい。地域活動、防災防犯分野では9月27日に事務局が作っていただいたものをその時の意見を基に、上の段のように修正した。次のページは景観・水辺空間分野を10月28日に議論したけれども、そのとき提示したものを、皆さんの議論を基に上の段のように修正した。

資料2の10年後の未来予想図で人と人のつながりが織りなすという「織りなす」という言葉は結構いろんな場所で使われているけれども、織るでいいのか。やはり重なるというのと、織りなすとは少し違うのではないか。織っていくと糸が一本ほつれると何かバラバラになってしまうような気がする。織りなすという言葉が、綺麗な言葉だけど、少し違うのではないかなと思う。

(木村委員)

景観・水辺空間、環境分野とまちづくり・都市基盤分野が似ていて、日常に心地よさを感じるというのは感情の部分である。まちづくりの方も安心と楽しさが両立は感情でないか。似ている言葉が並んでいるから違いがわかりづらい。どっちもなにか似たような安心系、心地よさと安心は似ている。

(山本委員)

文章を綺麗に書こうとすると、どこにでもあるような当たり前のことになるというようところで、そこが知恵の絞り方だが、何かやはりメッセージが入っていないといけない。それが、上野先生が言った織りなすではなく重なりである。いろんなやっぱり地域力のものを重ねていく。

あと日本一はやめたほうがいい。防災対策の先進都市というのはいいとして。

(金谷委員)

この辺は以前の議論でも出てきたことだとは思いますが、防災や防犯とかは、この話し合いをしている間にも、テレビとかでも結構報道されている。危うげな犯罪とかがあって、身近にいる子どもたちが犯罪の主体になってしまう。私も地域の町内会に行って、自分の家の前を通ったら、知らない人が高齢の女性にリフォームの話を持ちかけている、そういう現場に出くわした。話を聞くと、どうも怪しげな人がいて上に上がってみたら屋根が傷んでいるからという話をしているとか、そういうことが身近に起こり始めている。よく知っている女性だったし、見たことのない男性だったので、声掛けすると、その人は逃げるようになくなった。

だから下町というと通り一遍の話かもしれないので、墨田区らしさというのは、昔から見たことある人と、見たことない人は結構どの通りでもあって、あの辺で見かけたことない人がいるなというところがあった。だけど最近では知らない人とは話をしないようにとか、さっきの教育ともつながるが、自分の子どもには小学校で知らない人に声かけられたら返事しないようにとか、それは防犯上とか、子どもの安全のために必要なことなのかもしれない。危ないことから、やはり距離を置いて関わらないようにするというのも、1つのやり方かもしれないが、そこはできる範囲で、むしろ少し声かけをすることで、危ないことを回避するという効果があるのとか。

あと建物の作りとかでも強盗が入ってこないように塀を作ると、鍵をかけると、そうすると死角ができて強盗しやすくなるという面もある。建物の防犯において垣根を取っ払って見えやすくすることで、死角をなくして却って防犯性を良くするというのもあるので、一般的に言われていることと実際は違う。どっちが正しいのかは私も言い切れないが、墨田区は他と同じような方法をとっていいのか、それとも今までの暮らし方とかを生かしながら織りなすのか、積み上げるのかということ言えば、そういった話を積み上げるとか、コミュニティを積み上げることは決して無駄なことではなかったと思う。どういうふうに盛り込むかが難しいが、そのすみだらしさを防犯・防災に取り入れるということ言えば、積極的にコミュニケーションを取っていくこととか、もっとなんでもオープンにしていくとか、そういったことが、すみだらしさなのではないかと思う。

声かけることも聞くところによるとフレンドリーだという一面もあるみたいだが、声かけることで、ここはそうそう入り込めないところだとある程度知らしめるような意味もあるというのは聞いたことがある。

言葉としては難しい言葉ではないのかもしれないが、声かけがあるまちというのはそういったものを良くするという効果があるのかなという気がする。

(山本委員)

金谷委員の見通しという話は、要するに見守りしやすくするということ。多分防犯の世界だけでなく、どう地域として見ていくのかといったところがいろんなところに繋がっているが、何かそういうキーワードが1つ欲しい。

あとコミュニティは、ベタベタなコミュニティをイメージするような場合があるが、イギリスではセントラストといって薄い信頼関係、要はいざという時には助け合うが、普段はそんなに干渉しないところがある。

下町のコミュニティは、今日はどちらまでとかって、いやちょっとそこまでみたいな形で、変に何か人のとこに入らないという、そういう近所づきあいのルールみたいなものがあつたが、そういうものがなくなってきているというような話をするのであれば、やはり見守りなどのニュアンスが何か伝わるような形にしておくというのはとても大事かなという風に考えている。それが防犯だけでなく、子育てや高齢者や観光客に対するおもてなしなどにも何か繋がるといい。

資料3について、事務局より説明

(上野部会長)

地域活動、防災・防犯分野の塊と景観・水辺空間、環境の塊とまちづくり・都市基盤分野の塊があつて、それを議論してきたものをまとめたものが括弧書きのところに入っている。さらにそれらをまとめて何とかのまちという風なワードにできるといいなど、そのアイデアが欲しいということ。どういうアイデアがいいか。

だけど、左の、人と人のつながりが織りなす地域力日本一というのは、ちょっとこれはという意見が出てきてしまっている。

(真鍋委員)

地域力という表現はピンとこない。

(上野部会長)

つながりを重ねて広げる、そういうワードは出てきているが、まとまった時にこれでいいか。

(木村委員)

デジタル化について1つも入ってない。資料の中にも職員やこどもの意見としてデジタル化が入っているので、どこにはまるのか。感覚的に一番左のソフトの話だと思う。どちらかという都市基盤の話に近いから、この分け方も、もやっとしていいる。全体的に仕組みっぽく感じているのは、都市基盤の中では雑多な、その多様性みたいな都市基盤が面白いという、多分そこを目指していくというその中でも、その狭いスペースの中でも多分美しさとかそういうのをこどもは結構見ているので、綺麗な景色を求めているのではないかなと思っている。そういうのが多分真ん中のメッセージであまり入ってない。あと持続可能性みたいな、その循環みたいなのもアンケートの中に結構入っているが、そういうのも真ん中の方に入っていくといいのではないかなと思う。

(上野部会長)

木村委員がおっしゃったように、地域活動とまちづくりというと、割とソフト的な感じでまとまるような気もするし、防災・防犯分野と都市基盤で上手く作れるような気もする。

(木村委員)

その人と人とのつながり、そのHowになってしまうが、どうやってそれ繋がるのというのがDXをもっと推進していこうみたいなイメージがある。それがうまく表現されるといいかなと思う。

(須藤委員)

地縁と地域で分かれているが、どう違うのか。地域力とか地縁、学校とか防犯とかで分かれている。資料2の地縁・学校・趣味・防災・福祉で、他では地域力という形で謳われているが、地縁となると家庭も入るのか。いわゆる町会を法人化する場合には地縁という言葉を使う。

地縁はどこまで入るのか。町会となればもちろん家庭入る。そこで地域力という言葉で今回は動いているが。

(上野部会長)

地縁はご近所づきあい、町内会も、もしかしたら入ると思う。地縁と地域力はまた全然違う言葉だと思う。これらがみんな趣味も防災も福祉も学校関係も含めて、そのすみだの地域力になるといいという意味だと思う。

(須藤委員)

地縁力という言葉はないか。

(事務局)

地縁力という言葉は使ってはいない。

(須藤委員)

そうすると、この学校と地縁というふうに分けたときに、家庭は出てこないのか。よく地域・家庭・学校というふうに3つで括られている。そのこの文言の使い方がよくわからない。

(上野部会長)

ここできっと大事なワードは、その次にある、つながるきっかけは様々ということだと思う。だから、お隣づきあいから始まるつながりもあるし、学校で、PTAでとか、子どもを育てるママ友という、また違うつながるきっかけだし、防災訓練一緒にやったらなど、いろいろある。

一昨日まちづくり組織の話をしていた時に、まちづくりの担い手という言葉が出てきた。担い手を育てなければいけないとか、そういう話をして、やるぞって頑張っても、いざ、あの人は担い手だとか言われた時に、その活動がうまくいっている時はいいが、少し変更したりすると、担い手になった人に逃げ場がない。気軽に辞められない。本当はもしかすると辞めなくなったら、辞めてもいいぐらいなやり方で、だけど全くゼロになるような形でなくて、そういう組織ができるという話をした。きっと町会もやっぱり町会のメンバーになったら、役員になったりとかすると、なかなかやめられないというのはないか。そのときにすごく困ってしまうとか。結構重要だなと思った。嫌になったら辞めても文句言わない。

(金谷委員)

確かにいろいろな組織があって、PTAなんかはよくそういう話が出てくる。立候補者がいなくて、いつまでも決まらないとか。それでは、やはりなくしてしまえという話もあるが、なくしてしまったことで、きっかけが少なくなるのは確か。

町会も少しずつ変わっていて、昔は自営業者がそこにいて、商売やっている人とか、工場やっている人がほとんど担い手だったけれども、ほとんど変わってきている。むしろそういう人が少なくなり、勤めている方が担い手になって、その中でやれる方法で少しずつ変わってきている。

そこで実は必要なのは、DXとかそういった部分。すごく役に立っていて、木村委員はSlackとかやってらっしゃるみたいだが、昔はみんなが同じ場所に同じ時間集まらないと1つも決まらなかった。餅つき大会いつにするかということが集まらなければ決まらなかった。

今80代の人でも結構LINEとかそういったものを使う。そうすると同じ場所に集まらなくても、DXが進むことでコミュニケーションって実は図ることができていて、少しずつ変わってきてはいる。たまたまそういう人たちがそういうところに集まっていると変わるけれども、必ずしもみんながそういう状況になってはいない

というのがあるので、そういう器を作るとか、そういうところが実は大切だと思う。

だけでも、FAXにしてくれとか、郵便にしてくれとか、そうになってしまうとなかなか難しい。若い人も入りづらくなってしまふ。むしろそこをもっと使いやすくして何かベースをどこに置くかといったら、そこがベースになるぐらい変わってくるとだいぶ変わるのではないかなという気がする。

(山本委員)

やはり、ここの最初のところはネットコミュニティを入れたほうがいい。大事だと思う。ネットコミュニティと対面コミュニティを重ねる。これが別々になってしまっているから、世代間も分離してしまっている。だから、前は議論そこまできかなかったし、もうDXが当たり前なのかもしれないけど、出して行って、いろんな形で繋がっていくことが大事なと思う。

(木村委員)

地域力という言葉がいまいちと思う。たぶんまちづくりの方に入る暮らしやすさというのが、この最初の一番の方にニュアンスとして入っているのかな。人と人が重なり合ってみんなで暮らしやすいまちをつくるというネットワーキングをしてみたいな。地域力となってしまうと、すぐくぼやけてしまうから、むしろ暮らしやすさという方がシンプルでいいのではないかなと思う。そうするとこの都市基盤の方が暮らしやすさのメインキーワードではなく、さっき言ったような楽しさなど、何かもう少し違うワーディングをした方がいい気がする。

(上野部会長)

まちづくりと都市基盤が並列に書かれているが、楽しく暮らせるまちをつくる、それを支えるための基盤というのが、その都市基盤だったり、防犯とか防災とかであったり、ハードと言ったら怒られるかもしれないけど、どちらかというところ、そのハード的な部分がソフト的な生活とか、楽しさとか、そういうものを下から支える。最低限だから、そこはやっておかないといけないというのが都市基盤であり、防災とか防犯の分野で、特に防災というと墨田区は本当にすごい被災を何十年も前からしているので、そこに関してはどこにも負けないとかというのものもある。

(木村委員)

例えば京島とかの木密地域が10年後どうなるかというのが、このまちづくり・都市基盤を見て、イメージしやすい言葉になるのかなと思った。そうなったときに、しっかり今のその木密地域の良さを維持しつつ、そういう防災もしていくのか、防災体験や再開発しちゃえと言って、またビルを建てるのかというその方針が何かわかりやすいようなイメージの言葉が載ってくるといいと思う。

(須藤委員)

地域力というのは必要だと思う。というのは、東日本大震災のときの話で、ある保育園の園児と、ある水産業か何かの会社が、かなりつながりがあったことで昼間に津波が来たときにその会社が園児を助けたということがあった。

保育園・病院・一般の企業、地域にあるそういう方たちと一緒に防災訓練などを行うことでつながりをどんどん強めていき、万が一災害が起きたときに、少しでも被害が小さくなるようにする。医者や保育士、会社の代表者も参加してくれる。それから観光協会の方や土建組合の方、地域の人とのつながりを深めていくのは、やはり地域力を強めていくためではないかなと思う。

そのためには、先ほど先生が言った通り、町会を強めていかなければならない。今は大体 60 から 80 代の町会の役員がほとんどで、一番若くて 60 歳だが、その方がパソコンに詳しいので、やっとホームページを作ろうかというところまで来ている。だからそういった形で今まで我々がやってきたことを、そういう若い人たちにも共感していただいて入っていただいた。

辞めるのも自由である。ただ言えることは、次に渡す若い人もマンションにいれなければならないということで、それにはやはり先ほどスマホ教室だとか、そういったこともやらないと、若い人が入ってくれないのかなというふうに最近では考え始めている。

だから地域力を強めるためには、町会の力を強めないとは駄目ではないかなと思う。向島と京島は関東大震災の時にも燃えなくて、それから東京大空襲の時にも燃えなくて残ったから、あの木密地域が残っているわけで、そういった意味で、古い方が多く住んでいる。ずっと町会が続いている。それを次の世代、次の世代と言って、父も地方から出てきたが、東京に出てきて、それで今のところに住んで、町会の役職やって、その後、私も 40 代になって町会に入って、それで今続けている。

(上野部会長)

区は町会に補助金を出していると思うが、その根拠となるものは何かないのか。

(須藤委員)

区役所で墨田区全部見るわけにはいかないの、細かい点に関しては町会にやらせている。毎月いろんなお知らせが来る。町会の人々が各家庭にそのチラシを配る、あるいは回覧板で回す。そういった部分も含めて区でできない細かい点は町会がやる、そのための助成金である。

(上野部会長)

以前から言われている困り事に対して、区からの手助けはあるのか。

(金谷委員)

一応町会はずっとやっているの、町会の構成員を増やしたいけれども、もっと広報してくれと区に言う立場だが、区はそれを受けてマンションを建てる時でも、義務ではないが、町内会に入ると条例に書いていたりとか、あとは引っ越してきた人で、住民から区に問い合わせたときに冊子みたいな案内を送って、地元の町会に連絡するので、町会長とか役員が来たりとか、そういう形で取り持ってくれてはいるが、義務とかそういうのはないし、補助金も例えば会報出せばそれについては出るが、全体に対していくら出るというのはない。

(上野部会長)

そのときに地域を母体とする議員さんもいたりすると思うが、そういう議員さんたちはどういうふうに町内会に関わっているのか。

(金谷委員)

町会の役員として動くとか、中には議員さん自ら町会長になることもある。

(須藤委員)

議員さんがいる町会ばかりではない。ただやはり議員さんは各町会長には一応声はおかけになっていると思うけれども、町会はさっき言った地縁の中に入っている。

申請すれば東京都からも活動助成として助成金が出る。墨田区も地域活動推進課を通して出る。あとは社会福祉協議会からも地域福祉金があり、町会員1人につきいくら、そういう風にいるんなところから町会の方には助成金が出る。町会は会費が1ヶ月300円でやっているの、その経費だけではとても運営していけない。よくお祭りもあるし、どんなに少なくとも300万以上はかかっている。

(岸委員)

亀沢4丁目町会の副会長をやっている。同時に北斎のまちづくりの会の活動もやっている。一番ここが問題かなというのは、コミュニケーションをどう取るという、そういう手段の問題でなくて、やはり一番ベースのところ、夫婦2人子どもがいて、例えば地域の学校に行く、地域の幼稚園に行く、そういう家族が町会の主体であって、区民の主体だという意識で、すべてとは言わないけれども、かなりの部分が、それを限定にして仕組みができてしまっている。

だから例えば単身者がこれだけ増えている。高齢者、それから若い人もそうだが、人口が増えている。何で町会に入る人が少ないのか。多様な人がいるけれども、やはり、そういう人たちを組み入れる組織ではないというふうに、特に若い人には見られているし、高齢者でも単身の方にはそういう風に見られているケースが結構多い。私自身もちろん町会管理はしっかりやっている。マンション建てる段階から設計者や事業者とやっている。

一方、今の町会の組織の限界というか、そういうものを感じているので、コミュニティを重ね合わせるとか、地縁をベースにしたコミュニティだけでなく、もちろんそれも大事だけれども、それ以外の方法でコミュニティを作っていくって、あるときはこういう仲間でするという風な形でいかないと、手からこぼれてしまう。そういう方がたくさんいて、そういう方にどうやってというのは非常に難しい。区からのお金の仕組みも、あるいは情報を流す仕組みも町会ベースでいうと、結局届かない人もいっぱいいる。あなたのところに情報を届けるには、町会に入った方がいいと言っても、その辺が行き届かないことがあるのが事実。

だから、私はコミュニティでどうやってコミュニケーション取るかという手段の話でなくて、もっと基本的なところの町会の問題を感じる。

さきほどの町会辞められる、辞められないかの問題。これは、いくらでも辞めることはできる。ただ地域を離れるということは、これは別の問題なので、そこに住

み続けている限り、その地域と様々な距離感を保たなければいけないという問題がある。これはまた別の意味でも難しい問題が出てくる。だから単純に皆さん町会に入って、地縁のコミュニティを大事にしてというのも、もちろん1つの方法かもしれないが、私はこれからの将来を見た10年後はそうではない形で、具体的な提案をした方がいい気がする。

(上野部会長)

その町会のつながりとか、近所付き合いの必要がある時というのは、まさに災害の時の助け合いとか。

(木村委員)

災害を見ていると、やはり昔ながらの仕組みでは、もう到底対応できない事態が発生しているのではと思っている。今までの地域のその仕組みの力だけだと、もう限界に達しているというのが見えてきているので、やはり新しい仕組みを入れていかないと今後いけないと思う。さきほどの町会の仕組みも合わせて、ネットワークなどとかをやっていかなければいけない。

昔のやり方を踏襲することも大事だと思うが、やはりプラスアルファしていかないと、コロナだったり、大災害であったりとか新しいことが起きているので、それに対応できるように形を少しずつ変えていかなければいけないというふうに思う。

(杉山委員)

十何年、町会長をやっているが、町会は絶対必要だと思う。いわゆる地域力とかそういうようなこともあるが、防災や防犯とか、そういうことは全部町会でやっている。結果として日本は一番安全な都市だと思う。それは地盤が町会にあるから。それで日本は長寿社会になっている。町会の保健衛生部ではまちの人たちの保健関係とかもやっている。他の外国と違って、地盤によってそのようなことが行われ、日本は世界一の長寿国になっている。そういったことも含めて、やはり町会の力というのはすごいと思う。

戦後、マッカーサーは、戦争の元になったのが町会ということで、町会を敵視したため、町会の活動ができなくなった。その後、日本が世界に社会復帰したが、その前にちょうどマッカーサーがクビになった。それで町会関係も全部できるようになった。もう皆さん喜んで、復活した。町会はみんな七十年以上経っている。

(木村委員)

町会で過去にそういう防災とか防犯とかで役に立てられたという実績とかあったりするのかな。

(須藤委員)

消火器はいろいろ変わってきて、今はピンを外してやるが、十何秒しかかからない。ほとんどの方ができない。地元で火事を未然に防いだことがある。町会で消火器、街灯を持っている。消火器が赤い箱に入っているのを見たことがあるか。区のもの町会のもの、それと区の防犯灯と町会がつけている防犯灯があるから、町会

が地域にかなり浸透している。杉山委員が言われた通り、もう 70 年以上ずっと続いているから、街灯や消火器全部そういうものが置いてあって、いざというときにはその消火器を使う。うちの隣が燃えたときには消火器 20 本使った。

(木村委員)

最近起きているお年寄りへの特殊詐欺だったりとか、結構強盗が多くて地域が不安とか、今回の能登半島とか熊本の地震みたいに何か起きたときに、いろんな物資がもう集中的に届いてしまって捌く人がいないだったりとか、ボランティアの募集発信力がないし、ネットワークがないから人手不足だったりとか、いろんな地域の防災の問題が発生しているが、そういったところでの町会の役割みたいなものはあるのか。

(須藤委員)

大きな地震が来た時に町会がまず行うことはその地域に住んでいる方たちの安否確認である。災害ボランティアは社会福祉協議会が立ち上げてからでないと、入っていけない。

(上野部会長)

時間の都合上、この後議論してもらいたい内容について事務局から説明してもらう。

(事務局)

資料 4 はこれまで議論してきた内容を一覧で示していて、審議会や区民参画、職員参画の中で得られた意見を反映しているかどうかということを確認いただけるような資料になっている。

資料 5 から資料 7 については、区民参画や職員参画の中で得られた意見について、現時点で報告させていただける範囲で掲載させていただいている。

本日一番議論をしていただきたいところは資料 3 のところで、第 3 部会の一番上のテーマについてである。そちらについてご議論を深めていただければと思う。

(真鍋委員)

何かこれまで議論してきたコミュニティの塊が重要で、それが防犯・防災に繋がるといのがあったので、コミュニティの重なりを生かした安全なまちを入れたいと思った。

あとは、ゆるいコミュニティとか、ゆるいつながりという話があったので、人と人とがゆるくつながるまちとか、つながることでゆるいコミュニティの重なりが生まれるとか、なにかゆるいというのをいれるとどうかと思う。重くないとかそういったニュアンスのことを入れていきたいと思った。

(木村委員)

多様な暮らし方が安全でありながら、楽しく。こういった多様なというのが、そういった町内会もあるし、新しいコミュニティもあるし、多分多様である。多様さ

を受け入れて、かつ一番墨田区っぽいのが、災害とかから安全意識というのがやはり強いので、安全はやはり入れたい。

あとは楽しくというのは、コロナ禍は結構少なかったが、イベントが多い。もう10月・11月・12月とか本当に墨田区はイベント祭り。夏もお祭りがある、とにかく楽しい人柄、楽しくしようという思いが強い。わいわいがやがやみたいな、楽しいみたいな何かキーワードを入れたい。

(佐藤委員)

すみだに暮らす、すみだに生きるというところで、例えば先ほどの町会のことがあったと思うが、そこに暮らして、そこに生きていくという覚悟がなければ、やはりなかなか加わっていくことが難しいだろうと感じている。そこに愛着を感じられる土地があれば、おそらく人が寄ってくるし、そこに暮らし続けていけると思う。そういうところでは行政側のきめの細かなサービス、そういったものが実感できることで、コミュニティで広がっていくような気がする。

防災に関して言えば、どうしても防災は事が起きてから予算化がされて、対策が何となく動き出してという流れが普通だけれども、全ての防災に関しては事前対策が大事だと思う。安全安心が準備に比例するものなので、ぜひ行政側にはお願いしたいこととして、社会実験でも結構、防災に関して前衛的な取り組みというものを示していただけるようになると、それが人々の心を掴んでいくのかなと感じた。

そこに生きる、そこに暮らすということは、ある意味生きがいを感じる。生きがいを感じられるまちみたいな。それが情緒的という表現になってしまうのかどうかはよくわからないが、そこに生きる、そこに暮らすという目線でいろいろとこれからも考えてみたらどうかと思う。

(木村委員)

考えさせられる。3年前に戸建てを建てたので、その覚悟はできているので喋れるが、賃貸で暮らしていた時はそんなに地域に関心はなかった。

(真鍋委員)

多様なつながりとか多様なコミュニティを入れてほしい。

(金谷委員)

確かに多様なコミュニティがありすぎて、こう言ってしまうと語弊もあるけども、疲弊している団体がいっぱいあるのではないかな。町内会で若い人が入りたがらないというのは、その疲弊した世界にわざわざ入りたくないというのもある。PTAになりたくないというの、仕事があるのでそんなことに関わりたくない。

言っているのかわかるかあれだが、いろんな既存の団体は、本来は目的があって設立されたはずだけど、実は本当に必要なものは少なくて、それ以外のことに結構みんなが振り回されて疲弊しているなという、そんな気がする。

さきほど山本先生が薄い信頼関係の話をして、それが素晴らしいと思った。本当に必要なことをやれば、実はそんなにはないのではないかな。

私がいる京島のまちづくりでも、祭りが毎年あって、祭りの打ち合わせが年の半

分を占める。本来は防災のための集まりだけれども、なにか違うのではないかと思いつつ、もうそこにみんな巻き込まれていて、もう10年以上ずっとやっているからなかなか変えられない。必要なものは必要で、やらなければいけないが、その体制を維持するための仕組みみたいなもので疲弊してしまっているの、そこを何とか作り変えられないのか。そうすると、もう少し本質に力を注げるのではないのかなと思う。

やはり既存の人が集まって話し合うというのは少し限界に来ていると思う。ITとかそういったものをもっと本気で考えて、町会に必要なものと、防災で必要なもので、この接点だったら違う団体が1つのテーマで話すことができるはずだけど、そこができてきていないという気がする。そういうところを今後10年で積み上げられるのかどうか、密集したところだからこそ、やはりそういった問題を解決する仕組みのあるまちというか、何か具体的なものでなくて、仕組みがあれば、そういったものはクリアしていけるのではないのかなと思う。仕組みという言い方でいいのかどうか分からない。

(真鍋委員)

再構築か。

(金谷委員)

再構築だと思う。

(真鍋委員)

ネットコミュニティも関わってくる。

(金谷委員)

ネットコミュニティは1つ気になるところがある。リアルな実態がそこにはないのに、ネットだけに関わってくるというのもあって、そうすると何かリアルなものとは違う、誰がこれ言っているのだろうという匿名性が入ってくると荒れてしまうようなことある。その辺の作り方が難しい。リアルなネットコミュニティみたいなものであると、みんな責任持って関わっていけるのではと思う。

(山本委員)

ネットと対面を重ねていくという顔が見えるような、でも一方では忙しいし時間もなかなかとれない。コロナみたいなこともあるし。

安全は3つのサインアプローチがある。1つは環境、1つは教育、もう1つは仕組み。

これは先ほどの地域というところでも共通しているし、今のネットのやつも共通しているし、防災・防犯も共通する。

ここの修正案のところで、担っている人々の努力を理解しというふうに修正されてきて、先ほどの担い手の話、やはり認め合うのであって、やはり理解し合うことが必要である。

あともう1つは先ほどの議論があったように、次世代を育てていくという、墨田

	<p>区の構想として、そういう担い手を育てていくということも重要と思う。</p> <p>環境のところは、この部分はすごく良くなったけれども、織りなすは変えた方がいい。日本一も考え直した方がいいかもしれない。</p> <p>次のところが、環境って言葉が入ってきていない。やはりここで言っているのは、身近な環境だと思う。雨水であったりとか、水辺というの、四周水に囲まれているというようなことであったりとか、身近な緑、路地の緑であったり、もちろん大きな緑の空間であったりとか、それから地球環境の問題も大事だと思うが、自分事というところからすると、やはり身近な、それから日常的につながっていくというような、そこを環境というキーワードで、できれば持続可能なというところもやっていただくといいかなと思う。</p> <p>(事務局)</p> <p>よろしければ、1回事務局の方で預かりとさせていただく。今日いただいた意見の整理をさせていただき、キャッチフレーズと文章というところも事務局案を作らせていただく。次回の会議の前までに一度皆さんにメールでお送りをし、ご意見をいただいて、第3部会の案として1つにさせていただければと思う。</p> <p>また、先ほど第2部会で防災教育をしなければという意見が出ていた。やはりすみだらしいというところの中では、部会は分かれていても、思いは委員の皆様一緒なのかなというところは感じた。</p> <p>今回は12月16日の月曜日午後7時からすみだ共生社会推進センターで全体会を開催する。事務局からは以上。</p> <p>(上野部会長)</p> <p>以上で第5回の部会を終了する。</p> <p>解散</p>
所 管 課	企画経営室政策担当（内線3722）